

教材名「これが日本」(光文書院 6年 p 106 「集団や社会との関わりに関すること」 伝統や文化の尊重、国や態度を愛する態度)

1. 本教材について

教科書の文章には「ゆいさんのクラスではどんな“こと・もの”を大切にしていきたいか、みんなで出し合ってみました」とある。一方、まとめの欄には「日本の良さを守るために、自分たちでできることを考えましょう」「日本の良さが他にもないかどうか調べ、しょういかしあいましょう」とあって、こちらのほうが表題の「これが日本」と合っているように感じる。

しかし、「美しい自然」はともかく、「人を大切にする」などの項目は、項目自体があいまいで、どういう根拠でそう書いているのか疑問である。「安全なくらし」も、例えば殺人率は、現在、国際的にも歴史的にもきわめて低いが、東日本大震災の際の原発事故などを考えると疑問符がつく。いまでも日本の食品を禁輸の対象としている国もある。九州で原発事故が起こったら日本列島全体が住めなくなるという人もいる。伝統について言えば、ヨーロッパに比べても日本は過去の建造物を破壊し、あたらしく作り直してきたという歴史を持っている。

どのような場合も、事実に基づかない、あるいははっきりした根拠に基づかない材料は取り上げるべきではない。

2. 本教材を扱う際に、特に注意すべきだと考えたこと

「どんなこと・もの」を大切にしていきたいか、ということ話し合う機会にすればよい。ただ、いくつかの指標を参考にしても良いと思う。日本の自殺は国際的にもきわめて多い。男女格差の指標では114位である。国連が行っている幸福度調査は、順位よりもどのような指標を使って幸福度を測っているのか、ということに注目したい。日本が高いのは「所得と富」「個人の安全」で、低いのは「主観的幸福」「仕事と生活のバランス」「健康状態」である。

“お国自慢”はとくに神経質にならなくても良いと思うし、オリンピックなどで日本を応援するのもごく普通の感情であろう。こうした感情は「ありふれたナショナリズム(愛国心)」ともいえるべきものだが、子どもたちにはこの「ありふれたナショナリズム(愛国心)」の扱い方、つきあい方を学習してほしい。「ありふれたナショナリズム」がいつ「狂信的なナショナリズム」になるかもしれないのだから。

そのために特に「ありふれたグローバリズム」に注目して子どもたちにも伝えたい。「ありふれたグローバリズム」とは身近にある外国商品(百均に行けばすぐ見ることができる)身近にいる外国人、外国につながる隣人である。彼らは日本人とともに社会を支えていることに気づかせたい。

3. 指導過程

	子どもの活動や教師の発問等	留意点
導 入	<p>本教材を各自で読む。</p> <p>いくつかの注意事項を説明する。自殺の話が一番わかりやすいと思うので、どんな原因で自殺するのか紹介する。特に若者の自殺が多いことに触れる。</p>	<p>いじめに触れても良いが、いじめと自殺を安易に結びつけないよう、表現に気をつける。</p>
展 開	<p>教科書の指示に従って話し合いをするが、「大切にしたいと思うこと」と「日本の良いところ」が混在しているので前者で一貫させる。</p> <p>話し合いの結果を発表する。</p> <p>私たちが住んでいる社会を大事にしていくためには社会を構成している人間が肝心であること、現在はおおくの外国人も一緒にこの社会を支えていることを説明する。</p> <p>身の回りにある外国商品を紹介する。身近に外国人がいないか、グループで話し合い、発表する。</p>	<p>子どもたちにイメージが湧かないかもしれないので、スポーツ選手などを紹介するのも良いかもしれない。</p> <p>できれば身近な外国人、あるいは外国につながる人を紹介したい。</p> <p>そういう人あらかじめ探しておくが良い。</p>
ま と め	<p>今日の授業を聞いた感想をまとめる。どのような社会を作っていくかを決めるのは私たちを含めた人間であることに注意を喚起する。</p>	<p>隣人としての外国人は税金を払い、ゴミの当番を引き受け、場合によっては町内会の役員も引き受けている人々である。</p>